

古典的クライエントセンタード・セラピーの考える共感的理解

～ Bozarth の論文 (1997) の要訳と考察 ～

関西大学大学院心理学研究科 中田 行重
斧原 藍・大川 慧
岸 あかね・白崎 愛里
中西 達也

要約

本稿は Bozarth (1997) を要訳し、古典的クライエントセンタード・セラピーの立場が Rogers (C. R.) の共感的理解をどのように捉えているかを考察する。彼は治療的变化の要因は無条件の肯定的配慮であり、それを伝える手段が共感であるという意味でこの二つの条件は実質的に同じ経験であると考え。そしてリフレクションが共感であると誤解されているが、共感は気持ちの持ち方 (attitude) であることを強調する。Bozarth のこの論文の固有の意義の一つとして、共感的応答ではなく、共感から起こってくる反応 (Empathic Reactions) を概念化し、Rogers が presence という概念など新たな関係性の視野を開くまでの思索の流れを描き出していることが挙げられる。また、古典的クライエントセンタード・セラピーという立場は Rogers の考えに忠実に実践すると自他共に考えているが、Bozarth は Rogers の言う as-if は自己一致との関係で as-is である、とされており、この点は彼の固有の理論的展開かもしれない。課題として共感が彼の言うように内的体験であるならば、そのためにどのような努力をすべきかを検討しなければならない。

キーワード：古典的クライエントセンタード・セラピー、Bozarth、共感、
リフレクション

I. はじめに

現在、パーソンセンタード・アプローチ (Person-Centered Approach、以後 PCA と略す) において幾つかの学派が発展している。Sanders (2003) によると、古典的クライエントセンタード・セラピー (Classic Client-Centered Therapy、以後 CCCT と略す)、フォーカシング指向心理療法 (Focusing Oriented Therapy、以後 FOT と略す)、体験的パーソン

センタード・セラピー (Experiential Person-Centered Therapy、以後 EPCT と略す)、実存的アプローチ (Experiential approaches to therapy) がある。それ以外にも Pre-therapy (Prouty, 2008) のほか、Cooper & McLeod (2010) による Pluralistic Self というアプローチがある。それに加えて、Mearns & Thorne (2007) による、著者それぞれが英国で PCA カウンセラーのディプロマコースを運営してきた研究者による英国で PCA のバイブルとされて

いる本もある。これは内容的には CCCT に近く、そこに FOT までを含め、EPCT を含まないもので、上記のどの諸派にも当たらないためか、Purton (2005) はそれに標準的な見方 (standard view) という名前をつけている。これも 1 つの派と言ってもよいであろう。このような諸派は、いずれも Rogers (C. R.) の Client-Centered Therapy (以後 CCT と略す) あるいは Person-Centered Therapy (以後 PCT と略す) の考え方をもとに発展したものである。そして、Rogers の考えのうち継承した部分やそれをどう発展させたかの強調点の違いによって、いわゆる諸派として分かれている。

現在、欧米においてはこの状況を 1 つの PCA 国家に幾つかの諸派 (tribes) が併存している ("The Tribes of the Person-Centred Nation") と言うようになってきている (Sanders, 2003 ほか)。ところが、わが国ではフォーカシングは発展しているものの、その他の諸派についても、それら諸派を分けている考え方についても殆ど紹介されていない上、議論もなされていない。もちろん欧米とわが国とでは PCA を取り囲む状況も異なるので同じ発展をする必要はない。しかし、欧米において諸派を分けている実践上の技法や考え方のもとにあるのは Rogers 理解の違いである。そのような諸派の違いの議論を理解することは、わが国で PCA が更に発展する上で必要ではないだろうか。

例えば、Lietaer (1984) が、“セラピストは自己一致 congruence として自分が感じたことを伝えることがある”と述べたことに対して CCCT は酷く反論している (例えば Brodley, 1998)。その中で CCCT は、非指示性 (nondirectivity) をジャーズ派の最も中心的な原則と考え、自己一致の名のもとにセラピスト (Therapist, 以後 Th と略す) が自分の感じたことをクライアント (Client, 以後 Cl と略す) に伝えるのならもはや CCT は存在しない、とまで言っており、FOT や EPCT のことを Cl の体験を Th が操作する、と批判している。国際学会

(World Association of Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counselling) でこれは今でも大きな論点である。このように Rogers 理論をどう捉えるかによって理論や実践の発展に大きな違いをもたらす。わが国ではこのような対立が論点となることはなかったが、考えていけば実践・研究上の大きな論点になりうるものである。

そこで本稿では諸派のうち、CCCT の代表的論客である Bozarth (J. D.) による共感的理解についての論考を要訳し、CCCT が共感的理解をどのように捉えているかについて考える。CCCT をとりあげるのは日本のロジャーズ派のかなりの方が CCCT の立場に近いところでセラピーを行っているように思われるためである。また、共感的理解についての論考をとりあげるのは、“受容・共感”と一般によく言われるように、共感的理解は無条件の肯定的配慮と並んで Rogers の理論の中でも最も中心的なものであり、Rogers 自身も「これこそセラピーの本質的なもの」(1957)と述べているためである。

II. Bozarth (1997) の要訳

Bozarth, J. D. (1997) Empathy from the framework of client-centered theory and the Rogerian hypothesis (Bohart, A. & Greenberg, L. "Empathy Reconsidered" pp.81-102)

Rogers の共感概念は CCT の理論 (1959) および Rogers の仮説、すなわち必要十分条件 (1957) との関係で発展してきた。心理療法における共感の重要性を広めたのは Rogers と Kohut だが、Rogers の見方は Kohut と他研究者とも異なっている。Rogers は共感を、他の治療の前提条件としてではなく、それそのものが治療の中心的役割を果たすものであり、非指示的な態度を伴う対人関係のプロセスである、と考えていた。本論文は Rogers の共感に関する固有の考え方を検討するものであるが、結論から言うと次の通りである。

- (a)共感はあくまでも彼の必要十分仮説という文脈で生きてくるもので、自己一致と無条件の肯定的配慮と統合的に関連している。
- (b)共感はCIを特定の目標に向けて変化させるためだけでなく、CIの内的照合枠（internal frame of reference）を理解するためだけに起こるプロセスであり、その点で、無条件の肯定的配慮を伝えるものと言える。
- (c)共感はある特定の応答の仕方というより気持ちの持ち方（attitude）である。

【理論的枠組み】

人間の思考・感情・行動は有機体（organism）に生得的に備わっている実現傾向によって方向づけられるというのがRogers理論の基本となる前提である。人が心理的な問題を抱えるのは、重要な他者からの条件付きの受容により有機体の体験と自己概念の間に不一致を作り出すためである。自己一致した個人（Th）から向けられる共感的理解の文脈における無条件の肯定的配慮を知覚した時、CIの実現傾向は発動する。

【Rogersの共感概要の輪郭】

Rogersは共感を治療的变化の過程の中心に置いた点で、他の研究者とは異なっていた。彼は既に早期（1939）においてThに必要な資質を抽出しようとしており、これが後年の必要十分条件の先がけとなったのだが、彼が非指示的療法（1942）と命名した初めての理論には、共感という語は登場しない。しかし、共感概念の確立に向けて、受容的で関心を持った態度や同情的な同一化（identification）等を論じている。そして感情のリフレクション（reflection）という技法に焦点が当たり、Thの活動をCIの感情を明確化することに向け、それを彼は明確化、リフレクション、感情のリフレクションなどと呼んだ。この時点では“理解”は受容に含まれ、Th活動の役割は感情のリフレクションによって、CIがどのような感情を抱えていても価値ある人間として受け入れていることを伝えること

にあった。シカゴ大学時代も気持ちの向け方（attitude）を原則としていたとはいえ、研究のためあってThの応答の仕方に焦点が当たった。その後、リフレクションに対する誤解や技術的な使用に関して懸念するようになり、応答よりも気持ちの持ち方を強調するため“共感”という言葉を使い始めた（Rogers, 1951）。後年（1980）は、共感しようとするThの意思のほうに焦点が移った。

CCTの時代、Rogersは共感を治療者の活動であり、無条件の肯定的配慮と深く関係していると見ていた。事実、共感的理解とは、個人の照合枠の無条件の受容である。しかし、治療的变化の要因としての無条件の肯定的配慮に関しては明確な言及をしてはいない。

またRogersは“あたかも”という性質（注：共感的理解で強調された、CIであるかのように、というあり様）を失うことなく、CIの視点に立ってその内的照合枠を知覚すべきだと強く主張している。つまり、“あたかも”を重視することは、CIに同一化するのではないということである。

【例の統合的な理論（治療的人格変化のための必要十分条件）】

Rogersは必要十分条件（1957）はCCTだけでなく、すべてのセラピーで起こる治療的人格変化においてもあてはまると言う。そして、変化が起こるためにはThが受容的な共感的理解をしているとCIが知覚することが必要であると主張している。しかし、必要十分条件はThの行動の観点からではなく、気持ちの持ち方という観点から述べられている。Rogersの仮説から発展した他の共感概念やモデルは共感に行動的な枠組みを与えているが、そのような見方はCCTに対する誤解や矮小化につながる。共感的態度を示す特定の行動パターンなど一切ない。感情をリフレクションすることがCCTの共感だと見なされがちだが、そのような混同があってはならない。Rogers（1957）はThの共感の

欠如を示す形で感情がリフレクションされることもある、と述べている。

【Thの活動としての共感】

非指示的態度

非指示性は最近のPCAの論文で取り上げられることはほとんどないが、これはRogersの共感概念に重要な影響を与えており、彼の殆どすべての論文に暗に含まれている。彼は、CIの到達目標を定めず、「目標はCI自身の中にあり、それは生き方だ」と明言した。Thの目標はCIとのプロセスに制限される時、セラピーは最も効果的であると主張する。彼は、自分がこの場で出来る限りCIに対して本当の自分自身でいて、この関係の中で起こってくることに耳を傾けたいと言っているのである。Rogersのセラピーの本質は非指示的な共感性に根づいている。この理論の礎は実現傾向にあり、変化を起こす要因は無条件の肯定的配慮である。

セラピストのテクニックとその伝達

Rogersのテクニックに関する業績は逆説的と言えよう。リフレクションあるいは感情のリフレクション、あるいは同じ言葉を繰り返すこと(restatement)という技法の型があること(Teich, 1992)はThにとって共感的理解に達するための強力なツールである。しかし、RogersはそれがThの気持ちの持ち方に根付いていなければその価値はほとんどないと言い切るのである。彼にとって共感とは、テクニックとか公式、型、あるいは認知スキーマを超えたレベルで他の人を体験するという意味である。

【無条件の肯定的配慮と共感】

私の主張は、共感と無条件の受容とは本質的に同じ体験だということである。Rogers(1959)の人格の再統合の理論によれば、学習された価値の条件と自己・有機体経験間の不一致は、CIの生得的な成長プロセス(実現傾向)によって覆される。この生得的プロセスは、CIがThの無条件の肯定的配慮を知覚し、今度はそれを自

分自身に向けた時に活性化される。無条件の肯定的配慮は、関係において自己一致したThからの受容的な共感的理解を通して伝わる。それによってCIは自身に対して肯定的になり、自身の内臓的な体験、すなわちかすかに感じられた意味に耳を傾けるようになる。そして、より正しく基礎付けられた自己の部分が開け、自己は今や自身の体験過程との一致の度合いを一層高める。

Rogersの言う共感とは1人の個人としてCIを受容し、その内的世界を理解するという体験にThを深く引きずり込むものである。CCTでは共感は無条件の肯定的配慮の表れであり、同時にそれを伝える手段でもある。Rogers(1980)によれば共感の受け手にとっての意味の1つは、受け手が疎外感を薄め、自分には価値があって気遣われ、ありのままの人間として受け入れられていることを感じるということである。もう1つの意味は、真の共感とはあらゆる評価的、診断的性質から常に自由であるということである。Rogersが共感に帰する非指示的で受容的な性質は、実のところ、彼の無条件の肯定的配慮と同様である。

【研究による発見とRogersの共感】

最近の心理療法の効果研究を概観すると、かなりの程度、Rogersの共感が心理療法の成果に関係していると分かる。Rogers(1975)も研究から“理想的なThは先ず何よりも共感的である”、“Thは経験を積むほど共感的になる”など共感についての知見を挙げている。その上で、米国とドイツの研究では統合失調症や神経症と診断されたCIやカウンセリングセンターのCIにとって共感が効果的であることが、多くの証拠をもって示されていると述べている。こうした研究成果はRogersの仮説を再考する土壌を作り出している。

【共感的な構え】

Rogersの共感に関して典型的に見られる質問

の1つが“どうやって共感するのか?”というもののだが、そのような考え方自体がPCAの誤解の大きな原因の1つである。Rogersのいう共感とは、共感を伝えることや共感的な応答をすることではない。治療の変化をもたらすためのTh側の条件は全て内的で主観的体験である。治療的に見える治療者の言動が実は治療的な態度を具現していないこともあるし、その逆もある。Rogersの共感に関する議論ではしばしばリフレクションが共感と混同されるのだが、それに関する自分(Bozarth, 1984)の考えは次の通りである。

リフレクションは共感ではない。それはThの共感性を高めるものであり、CIを理解しているかを確認し、その理解を伝達する1つの方法である。また、CIの世界に入り込む1つの方法でもある。それ以外の共感のあり様がまだ十分に研究されていないのは、それが簡単に観察できるようなものでないからである。

共感的応答 (Empathic Responses)

かつてRogersは、共感を伝える方法をリフレクションまたは感情のリフレクションとみなした。だが、リフレクション的応答についてRogers(1986)が最後に言ったのは、それはCIについての自分の理解が正しいかを調べようとするものだ、ということである。彼は方法としてのリフレクションの考えから離れた後、治療者の気持ちの持ち方(attitude)あるいは更に後になると関係性に焦点を当てるようになったが、一貫していたのは、共感的応答は言語的であれ非言語的であれ、また、どんな表現であれ、CIの内的照合枠に出来るだけ寄り添おうとするものである、という考え方である。

質問や要望に対する応答

CIがThに質問や要望をする場合に重要なのはThがこうした状況にうまく適応し、質問に誠実に答えることで、CIに対して受容・共感的に調和した態度を示すことである。建設的な自己を指向するCIの能力を尊ぶCCTでは彼らの声を尊重し、信頼する必要がある。

共感的理解の応答過程 (Empathic-Understanding Response Process)

シカゴ大学時代にRogersが注力していたリフレクションよりも洗練されているプロセスを、Brodley(1977, 1986)は“共感的理解の応答過程”と呼んで抽出した。これを見るとCIのプロセスとの関係でThの受容・共感的態度がどのように応答に起こるかが具体的に分かる。Rogersやその他の人の多くの例が入手可能であり、共感的な構えの持ち方やCIの信頼の仕方を学ぶ最も良い方法かもしれない。

共感から起こってくる反応 (Empathic Reactions)

Rogers自身の応答の殆どは(上記の)共感的理解の応答として分類され得るものであるが、彼は治療者としての態度条件が具現化されるための他の在りようについてしばしば論じた。Rogersの反応(react)には、CIとの関係に生きるということによって、CIに共感しつつ個人としてCIとそこにいる、と彼自身に感じられるような様々なものがあった。シカゴ大学時代はThの言動に焦点を当てたが、それはThの応答へのCIの反応を調べる量的研究のためであり、言動を重視しようという意図はなかった。彼は自分のセラピーが操作的な応答と誤解されていることに気付いてからCIの内的照合枠という考えを言い始めた。

彼は後年、CIとの全体的な体験的融合という考えに惹かれ(flirtation)始める。自身の未知なる何かにあふれている時、自分の存在自体が癒しに満ちているようであり、関係における一見奇妙に思える直観的な在り方が治療的だったと後に分かる、と言う。

また彼は共感に関してグループ体験から大きな影響を受け、ラージグループでは何が起きているかを理解するなど期待も出来ないが、自分自身をそこで生起するプロセスにゆだねることが出来ると何か(意味あることが)が起けると述べている。彼は共感的応答にも眼を向けたが、共感から起こってくる反応の重要性にも注

目していたのである。すなわち、どんな応答をするかなど気に留めることなくCIの体験全体をそっくり丸呑みするのであるが、実際グループで彼はメンバーを信頼することを一層学んだのである。

有名な「Gloria」との面接(Shostron, 1965)で「あなたは私にとってとても良い娘のようだ」というRogersの返答については多くの人から、援助的であったかもしれないが共感的応答ではなかったと言われている。しかしこれが彼の内なる未知の何かに触れることから生起しているのだとすれば、これも共感から起こってくる反応(empathic reaction)なのかもしれない。私が提示したidiosyncratic empathy(1984)は、言語的応答に現れない共感の例である。

共感から起こってくる反応という概念は理論的には自己一致と共感につながりがあることを示唆している。自己一致はRogersにとって最も重要な条件となったが、彼はこれを“透明性”とも呼び、人と人の出会いにおけるその重要性に言及するようになった。私は(1984)これらのことから、PCAのThの役割を、十分に透明であることによって判断を差し挟むことなく、あたかも他の人であるかのように世界を見ることであり、その人の成長の最大限の可能性に向けて形成的傾向を加速させることと論じた。

それゆえ、Thは自身の感情、それはまるでCIの感情であるかのような感情に、途切れることなく気付いていなければならない。それはもしかしたら「as if」ではなく、むしろ「as is」かもしれない。Thの自己一致は共感と完全に絡み合っているようである。関係において、Thの自己一致と透明性が増せば増すほど、共感も増すだろう。もし、Thが深くCIに同調しているならば、Thの体験の大部分は、奇妙な空想でさえも、CIそしてCI-Th関係に対して治療的関連性を持つだろう、と私(1996)は主張した。

【Rogersの共感に関する私の主張】

1. 共感の実現傾向を土台とし、自己一致と無条件の肯定的配慮と完全に統合されている。
2. Rogersのセラピーには本質的に指示性が入り込む余地はない。非指示はRogersの共感の概念に大きな影響を与えた。
3. テクニックは治療的態度に根付いており、CIの照合枠に対する共感的な応答の中での、Thの内なる体験に基づいている。
4. 共感と無条件の受容は本質的には同じ経験である。
5. 最新の研究結果は効果的な心理療法におけるRogersの言う共感概念の意義を実証している。
6. Rogersの共感、共感のコミュニケーションや共感的反応と同じではない。

Ⅲ. 古典的クライエントセンタード・セラピーの考える共感的理解

CCCTという立場はFOTやEPCTのようにRogersの主張の一部を発展させるのではなく、主張をそのまま継承しようとするものである。彼らはRogersの理論的な展開の中で中核となる概念や、それに関連する概念との関係を、より目鼻立ちをはっきりと体系化して提示する。それによってRogersの理論がテクニックとか操作とは無縁の、人と人との出会いの関係性の質を論じたものであることを主張する。特に本論文はその特徴が前面に出ている。Bozarthは誤解されがちなRogersの理論を誤解なく理解すべきと強調した上で、その理論的發展の経過を検討し、Rogersが受容・共感を大事にする点で生涯、何も変化してないように見えて、実はある方向に向けて進展してきたことを描き出している。

CCCTそしてBozarthの本論文の意義をもう少し見ておこう。CCCTはRogersが一貫して大事にした受容と共感を強調するという点で、他のPCA諸派と共通する。しかし、CCCTは

セラピーの治療的変化の中心的要因を無条件の肯定的配慮とし、共感を通じてそれがCIに伝わると考えるので、FOTの体験過程という概念にも言及しないし、EPCTのように治療的変化のために情動に焦点をあてた体験課題を行ったりもしない。また、共感のリフレクションという応答の言動ではなく内的で主観的な気持ちの持ち方であることを強調し、CCCTは他の学派とも他のPCA諸派とさえも異なるのだ、いや、他の諸学派はRogers理解を間違っているのだ、と言おうとしていることが読者には読み取れてくる。そして、共感的応答 (Empathic Responses) ではなく“共感から起こってくる反応 (Empathic Reactions)”を概念化し、シカゴ大学以後のRogersがpresenceという概念など新たな関係性の視界を開く(1980)までの実践・思索の連続した流れを描き出していることは本論文の大きな意義であると言えるだろう。

CCCTはRogersの主張を繰り返すだけのようには思われがちであるが、Rogersの進展の経過を統合的に理解しようとするために、却ってRogersの論理と異なる点がある。Rogersは共感的理解においてas-if(あたかも)という性質が失われてはならないと強調したが、Bozarthはas if(あたかも)CIのように感じるのではなく、“それはもしかしたら「as if」ではなく、むしろ「as is」かもしれない”と言う。すなわち、Rogers(1957)はTh個人としての感情があつて、それとは別に、あたかもCIが感じているかのように感じることをas-ifを失わないと言ったのであるが、何の意図も判断もたずCIに共感してその場にいることでThがCIとは別の個人的感情を抱えているというのではなく、Th自身が個人としてCIと同じように感じているのかもしれない、とBozarthは言うのである¹¹⁾。Bozarthのこの主張が、Rogersが実践で行っていたが理論化していなかったものをBozarthが言語化したものか、それともRogersの実践と異なるBozarthのCCCTとしての独自の発展なのかは分からない。興味深いのは本論文でも

Bozarthが述べているようにRogersは早期において同一化を論じていながらCCTの時代には同一化すべきでないことを論じるように変わっている点である。紙数の関係でこれ以上は論じられないが、晩年のRogersは理解することよりも共感しようとしてTh個人としての判断を全くなくしてその場において、そこで起こるプロセスに身を委ねるということに焦点が移っていった。その関係性の探索はCCCTに限らずPCA諸派にとっての検討課題であろう。

なお、Bozarthは、リフレクションは受容・共感を伝達する手段に過ぎず、共感の現れ方は様々だと主張している。しかし、彼自身が言うように共感が内的な体験であるのなら、面接室の場にあつてセラピストがどのような内的な体験をするように努力するかが述べられていない。今後、共感的理解のためのセラピストの内的な努力が検討されねばならない。

文 献

- Bozarth J.D. (1984) Beyond Reflection: Emergent Modes of Empathy, Levine R.F. & Shlien J.M. (Eds.) *Client-Centered Therapy and Person-Centered Approach: New Directions in Theory, Research and Practice*, New York: Praeger, 59-75.
- Bozarth J.D. (1996) Techniques in person-centered therapy, In Hutterer R, Pawlowsky G, Schmid P. & Stipsits R. (Eds.), *Client-centered and experiential psychotherapy: A paradigm in motion*, New York: Peter Lang, 363-368.
- Bozarth J. D. (1997) Empathy from the framework of Client-Centered Theory and the Rogerian Hypothesis, In Bohart A. C. & Greenberg L. S. (Eds.) *Empathy Reconsidered*, American Psychological Association, Washington D. C., 81-102
- Brodley B. T. (1998) Congruence and its Rela-

- tion to Communication in Client-Centered Therapy. *Person-Centered Journal*, 5(2), 83-116.
- Cooper M. & McLeod J. (2010) *Pluralistic Counseling and Psychotherapy*, Sage Publications: London.
- Haugh S. (1998) Congruence: A confusion of Language, *Person-Centred Practice*, 6 (1), 44-50.
- Lietaer G. (1984) Unconditional positive regard: a controversial basic attitude in Client-centered Therapy. In Levant R. F. & Shlien J. M. (Eds.), *Client-Centered Therapy and The Person-Centred Approach: New Direction in Theory, Research and Practice*, New York: Praeger, 41-58.
- Mearns D. & Thorne B. (2007) *Person-Centred Counseling in Action, Third Edition*, London: Sage.
- Prouty G. (2008) *Emerging Developments in Pre-therapy: A Pre-therapy Reader*, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Purton C. (2005) *Person-Centred Therapy: the focusing-oriented approach*, Palgrave Macmillan. (日笠摩子訳 (2006) パーソン・センタード・セラピー——フォーカシング指向の観点から 金剛出版).
- Rogers C. R. (1939) *The clinical treatment of the problem child*, Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers C. R. (1951) *Client-centered therapy: Its current practice, implications and theory*, Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers C. R. (1957) The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21 (2), 95-103. (伊東博・村山正治訳 (2001). カーシェンバウム・ヘンダーソン編 ロジャーズ選集, 265-285).
- Rogers C. R. (1959) A Theory of Therapy, Personality and Interpersonal Relationships as Developed in the Client-Centered Framework. In Koch S. (Ed.), *Psychology: A Study of a Science*, 3, New York: McGraw Hill, 184-256. (伊東博・村山正治訳 (2001). カーシェンバウム・ヘンダーソン編 ロジャーズ選集 (上), 誠信書房, 286-313).
- Rogers C.R. (1975) Empathic : an Unappreciated Way of Being. *The Counseling Psychologist*, 5 (2), 2-11.
- Rogers C.R. (1980) *A Way of Being*, Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers C. R. (1986) Reflection of Feelings and Transference. *Person-Centered Review*, 1 (4), 375-377. (伊東博・村山正治訳 (2001). カーシェンバウム・ヘンダーソン編 ロジャーズ選集 (上), 誠信書房, 152-161).
- Sanders P. (2003) *The Tribes of the Person-centred Nation: A Guide to the Schools of Therapy Associated with the Person-centred Approach*, Ross-on-Wye: PCCS Books. (近田輝行・三國牧子・小野京子・神谷正光・酒井茂樹・清水幹夫・末武康弘訳 (2007) パーソンセンタード・アプローチの最前線コスモス・ライブラリー).
- Shostrom E. L. (1965) *Three approaches to psychotherapy (Part 1)* [film]. Orange, CA: Psychological Films.

注

- 1) この文脈で Bozarth は透明性 (transparency) という語を用いているが、これはセラピストの内面がクライアントに見えているという意味 (Sheila, 1998 ; Brodley, 1998) では文意が通じない。おそらく、セラピストの個性がなくなっている状態、という意味ではないかと筆者らは考えている。